

川辺郡猪名川町

北田原・南田原条里遺構 発掘調査報告書

-（主）川西篠山線道路改良工事に伴う発掘調査報告書-

平成23（2011）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

北田原・南田原条里遺構 発掘調査報告書

-（主）川西篠山線道路改良工事に伴う発掘調査報告書-

平成 23 (2011) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



遺跡の遠景（南から）



遺跡全景（北西から）

卷頭図版 2

調査区全景



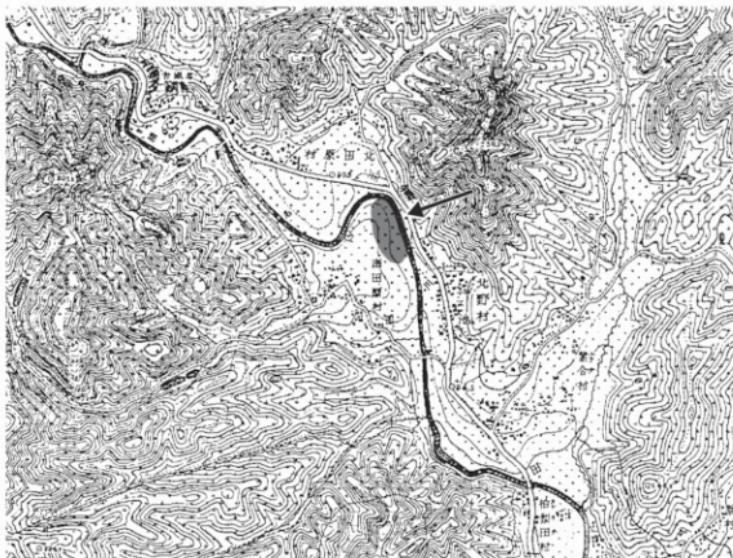
調査区の位置（垂直写真 上が北）

例　　言

1. 本書は川辺郡猪名川町南田原に所在する「北田原・南田原条里遺構」の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は（主）川西篠山線緊急道路整備事業に伴って平成18年度に実施した。調査は兵庫県阪神南県民局県土整備部宝塚土木事務所の依頼を受け兵庫県立考古博物館（当時）が実施した。
3. 本発掘調査に先行して遺跡の存否を確認するため、分布調査・確認調査を平成17年度に実施している。
4. 整理作業は平成22年度に兵庫県立考古博物館で実施した。
5. 遺物に付した番号は図版・写真図版などと統一を計った。また、土器・陶磁器については通し番号とした。
6. 遺構写真是各担当職員が撮影し、遺物写真については（株）谷口フォトに委託した。
7. 調査に際して使用した標高は東京湾平均海水準を基準にしている。
8. 本書の執筆は山上雅弘（第1・2章・3章2節・第5章）・長濱誠司（第3章1節）が担当した。
9. 本書にかかる遺物・図面・写真などの資料は兵庫県立考古博物館（兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1-1）において保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々のご指導・ご教示を頂いた。記して深く感謝の意を表します。
猪名川町教育委員会 井上知香・同左菅澤敏弘（現高砂市教育委員会）・川西市教育委員会 同野慶隆・
大阪府能勢町教育委員会 重金誠



第1図 遺跡の位置



陸軍参謀本部作製 仮製地形図「銀金山」(明治20年)



国土地理院作製 1/25000地形図「広根・武田尾」(平成20年)

第2図 遺跡の周辺地形

本文目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 整理作業の体制	
第2章 遺跡の環境	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	5
第2節 出土遺物	11
第4章 まとめ	16

卷頭図版目次

図版1 遺跡全景

図版2 調査区全景

挿図目次

第1図 遺跡の位置	第2図 現場の周辺地形図
第3図 周辺の遺跡	第4図 調査前のA地区周辺（南から）
第5図 道路完成後の現場周辺（南から）	第6図 遺物観察表（1）
第7図 遺物観察表（2）	

図版目次

第1図 調査区位置図	第2図 A地区全体図
第3図 A地区遺構（掘立柱建物跡・溝）	第4図 A地区遺構（土坑）
第5図 B-1地区全体図・遺構（土坑）	第6図 B-2地区全体図
第7図 B-2地区遺構（掘立柱建物跡・土坑）	第8図 B-2地区遺構（土坑など）
第9図 出土遺物1	第10図 出土遺物2

写真図版目次

写真図版1 遺跡全景	写真図版2 A地区全景
写真図版3 A地区近景	写真図版4 A地区遺構
写真図版5 A地区遺構	写真図版6 B地区全景
写真図版7 B-1地区近景・遺構	写真図版8 B-2地区近景・遺構
写真図版9 B-2地区近景・遺構	写真図版10 B-2地区近景・遺構
写真図版11 B-2地区近景・遺構	写真図版12 B-2地区近景・遺構
写真図版13 出土遺物	写真図版14 出土遺物
写真図版15 出土遺物	写真図版16 出土遺物
写真図版17 出土遺物	

第1章 調査に至る経過

第1節 調査の経緯

兵庫県阪神北県民局県土整備部宝塚土木事務所では（主）川西篠山線緊急道路整備事業（北野バイパス）を計画したが、開発対象地は周知の遺跡「北田原・南田原条里遺構」の範囲内に位置するため、平成17年度に分布調査および確認調査を行った。この結果、埋蔵文化財の存在が確認されたため、兵庫県教育委員会埋蔵文化財が（当時）上記事務所の依頼を受けて本発掘調査を実施した。

なお、分布調査（2001044）は平成17年4月15日の1日間で、岡田章一・渡辺昇が担当した。これを受けておこなった確認調査（遺跡調査番号2005151）は調査期間が平成17年9月5日・9日および11月24日の3日間、調査面積169m²で、渡辺昇・西口圭介が担当した。

本発掘調査の調査期間は平成18年7月10日～8月18日で、調査面積が1,095m²である。また、調査は兵庫県立考古博物館の山上雅弘・長濱誠司が担当した。

本発掘調査はA地区・B-1地区・B-2地区の3地区について実施した。作業は地区ごとに重機掘削をおこない、人力掘削で遺物包含層を掘削し遺構面を検出した。各地区的調査に際して個別の遺構写真・地区全景写真などは、適宜足場を用いて撮影した。また、遺構図面に関しては1／20縮尺を基本として調査員・調査補助員が作成した。調査区全体図については航空測量を8月9日に実施している。

この他普及活動の一環として7月29日に地元向けの説明会を開催し40名の参加者を得た。

・現地調査の体制

調査員 山上雅弘・長濱誠司

調査補助員 野村大作・門田論佳・松井利可子

事務員 伊藤道子

第2節 整理作業の体制

本遺跡にかかる整理作業は平成22年度に接合～実測・トレース、さらに報告書の刊行にいたるまで単年度で実施した。

・整理作業の体制

接合・復元 箕子ふさ恵（主任技術員）、三好綾子（企画技術員）、

谷脇里奈（図化技術員）、宮野正子（同左）

金属器保存処理 長濱重美（企画技術員）、前田恵梨子（図化補助技術員）

実測・トレース 宮田麻子（主任技術員）、矢木加奈子（企画技術員）、

西村美緒（図化技術員）

第2章 歴史地理的環境

第1節 地理的環境

猪名川町は兵庫県と大阪府との府県境に位置する。丹波との国境付近に源流を持ち大坂湾にそそぐ猪名川はこの地域最大の河川であるが、猪名川町はこの川の上流域を占める。町域はこの川が形成する小規模な谷底平地に点在する集落からなっている。

本遺跡周辺も谷底平地に位置し、中央を猪名川が蛇行して流れている。平地の規模は南北500m、東西300mほどで、盆地地形を形成している。平地の北側に北田原、南側に南田原の2地区があるが、調査区が位置する南田原地区周辺は猪名川が東端を流れ、西側に2面の段丘面が形成される。上位面は標高90～100mの高さで現在の集落が形成され、下位面は河床から比高差5m前後の高さで全面が水田となっている。今回の調査地点はこの下位段丘面の東縁辺から河床への傾斜面に当たっている。

第2節 歴史的環境

町域の考古学的調査は多田銀銅山に関わる鉱山関係の調査以外は確認調査や、不時発見時の立会調査などを除くと、本格的なものはこれまでなかった。

猪名川町域の原始・古代の遺跡は、猪瀧遺跡で石器、岡ノ下散布地で石器、古西・釜床遺跡、猪瀧跡、木津中遺跡・木津上遺跡でそれぞれ縄文土器、大野原遺跡で縄文から平安時代までの土器が、さらに北田原遺跡・笠尾遺跡では古墳時代の須恵器が採取されたとされている。ただし、これらはすべて散布資料であり考古学的な検証を経たものではないので、遺跡の詳細は今後の資料の蓄積を待たなければならない。このように古代以前の遺跡の詳細を語る資料は少ないが「新撰姓氏録」には渡来系氏族と思われる楊津連・造の名が登場しており、文献上では早くから人々が定着し、開発が進められていたことが知られている。

奈良時代になると北ノ町造物散布地・八ノ坪散布地・畠遺跡・民田遺跡・笠尾遺跡で土器が採取され、北田原・南田原条里遺構・柏梨田条里遺構などもこの時期からの遺跡とされている。ただ、これらも遺跡の詳細については不明としなければならない。ただ、一方で東大寺建立を目的に僧行基が設置した四九院の一つ、楊津院の比定地が猪名川町木津であるとされている。この時代に集落が形成され、開発がある程度進んでいたことは疑いがないだろう。さらに平安時代では、つづじが丘住宅造成前の調査により10世紀後半の奥井谷古墓が確認され、海獸葡萄鏡の破片が出土している。この時代には紫合遺跡・杉尾遺跡でも土器が採取されており、継続した人々の営みがあったことを窺わせてくれる。

さらに、本遺跡が所在する北田原・南田原条里遺構は北々西から南々西方向に長軸をもつ盆地地形が形成されるが、この地形に沿った水田の条里地割の存在が指摘されている。一説にこの水田景観が奈良時代に遡るとも言われるが、条里の施工時期や詳細については明らかではなく、今後の検討が期待される。

中世の猪名川町域は多田院領として知られる。多田院（川西市多田）は天暦元年（970）源満仲の創建と伝わるが、満仲は猪名川流域の所領の開発を行い、周辺の経営をおこなったと考えられている。こ



遺跡名

- | | | | |
|----------------|---------------|---------------|--------------------|
| 1. 北田原・南田原条里遺構 | 2. 南田原遺跡 | 3. 北田原遺跡 | 4. 丸山墓地遺跡 |
| 5. 摂坂墓地遺跡 | 6. 川西遺跡 | 7. 東光寺石塔群 | 8. 楓並・万善坑道群 |
| 9. 寺ノ下通遺物散布地 | 10. 渕ノ上遺物散布地 | 11. 鬼ケ門道跡 | 12. カツケガ阪墓地遺跡 |
| 13. 対津遺物散布地 | 14. 樅並祭祀遺跡 | 15. 牛ノ木坑道群 | 16. 多田銀銅山 |
| 17. 銀山城跡 | 18. 銀山大坂口古道 | 19. 大坂口番所跡 | 20. 中田ヶ谷墓地遺跡 |
| 21. 猪洞遺跡 | 22. 広根遺跡 | 23. 北小谷墓地石造品群 | 24. カイチ遺跡 |
| 25. 紫合遺跡 | 26. 北ノ町遺物散布地 | 27. 嵐嶼畠遺跡 | 28. 紫合・柏梨田条里遺構 |
| 29. 井ハノ谷遺跡 | 30. 井ハノ谷南遺跡 | 31. 小堂ノ上遺跡 | 32. 三ツ原墓地石造品群 |
| 33. 安養寺裏山石造品群 | 34. 建ツサ遺跡 | 35. 善福寺遺跡 | 36. 原遺跡 |
| 37. 宮垣内遺跡 | 38. 和田遺跡 | 39. 上野古宮遺跡 | 40. 西ノ垣内遺跡 |
| 41. 小西・金床遺跡 | 42. 牛若山墓地遺跡 | 43. 安養寺境内石造品群 | 44. 楠川遺跡 |
| 45. 向大道遺跡 | 46. 向大道旧道 | 47. 西垣内遺物散布地 | 48. 民田・内馬場坑道群 |
| 49. 下阿古谷觀音堂跡 | 50. 西田遺跡 | 51. 西峰城跡 | 52. 民田遺跡 |
| 53. 上垣内遺物散布地 | 54. 毛沙門堂山墓地遺跡 | 55. 西垣内遺跡 | 56. 能勢谷遺跡 |
| 57. 木津城跡 | 58. 木津坑道群 | 59. 木津下遺跡 | 60. 三藏山麓遺跡群 |
| 61. 三藏山城跡 | 62. 木津中遺跡 | 63. 木津上遺跡 | 64. 天沢寺石塔群・柳津院跡伝承地 |
| 65. 木間生遺物散布地 | 66. 木間生遺物散布地 | 67. 林田遺物散布地 | 68. 桜原遺跡 |
| 69. 桜原遺物散布地 | | | |

第3図 周辺の遺跡

れがのちの多田荘となり、多田院を中心とする荘園となった。そして荘内のこの地に住んだ多くの武士が源氏の末裔を名乗った。これを鎌倉・室町時代には幕府が承認したことから、多くの幕府御家人が多田荘内に誕生し、由緒を誇った。多田荘の範囲は猪名川町全域、および川西市・三田市・大阪府能勢町域の一部が含まれるが、猪名川町域はこの多田荘の中心的な役割を果たしたと考えられる。

南北朝時代には赤松則祐が田原に在陣したという。また、長種則長（広峯長種の弟）・後藤基景らも従軍したという軍忠状が発給されている（県史「史料編Ⅰ」中97「後藤文書」）。戦国時代には塙川氏と能勢氏の確執から多くの城郭が築かれている。現在町内には銀山城跡・三藏山城跡・木間山城跡・木津城跡・西峰城跡・杉尾城跡・定星寺居館跡・若城跡・愛宕山城跡・並尾城跡などの小規模な山城や居館が知られている。

戦国時代末期には多田銀山の開発が進み多くの鉱脈で採掘が始まるが、織豊政権期に大規模に開発され、やがて江戸幕府へと引き継がれ、採掘場所には鉱山町が成立し、管理のために大坂城代管轄の代官所（代官所跡遺跡）も設置された。

多田銀山は天禄元年（970）に金瀬五郎が金懸間歩より銀を掘り出し満仲に献上したことが伝わる。これは多田源氏の発展に絡んで作られた伝承の可能性が高いといわれる。多田銀銅山の史実として確かな記録は、「百練抄」に長暦元年（1037）摂津国能勢郡よりの献銅が記されたものや、能勢採銅所が現在の大坂城代管轄町域に設置されたことが、建暦元年（1211）の「左弁官下文」から知ることができる。

引用文献

猪名川町教育委員会2006「多田銀銅山代官所跡遺跡」

川西市教育委員会2003「川西市栄根寺廃寺跡遺跡」

猪名川町1987「猪名川町史 第1巻」



第4図 調査前のA地区周辺（南から）



第5図 道路完成後の現場周辺（南から）

第3章 調査の成果

A地区の調査

当地区は北田原南田原条里遺構の北端付近にあたり西から東へ緩やかに傾斜をみせる。調査区北および東側を猪名川が流れ、東端では河道への落ち込みが検出された。

遺構面は現水田面直下で検出した。西端付近は微高地の端部にあたり安定した基盤層となっているが、大半の部分は河川により堆積した砂層の上面が遺構面となる。

遺構は主に北西半部に集中し、掘立柱建物跡2棟の他に柱穴や土坑を検出した。南東半部は遺構は疎らであり、土坑、溝を少数検出したのみである。遺構自体は後世の土地利用により削平されているとみられ、残存状態は良好でなく、削平により消滅したものも少なからずあると思われる。なお、河道への落ち際で護岸の一部とみられる石組みが検出されたが、その所属時期は不明である。

遺構

掘立柱建物跡

S B01

調査区北西端で検出した。2間(4m)×3間(5.6m)以上の南北棟の総柱建物南北棟である。一部擾乱により損なわれ、北西隅は調査区外へ延びる。桁行はN-5°Eの方向を示す。柱間は概ね2mを測るが、桁行の西側1間は約1.5m、梁行の南側1間は約1mとなる。柱穴は掘方の径20~30cm、深さ20cm以下である。南西隅の柱穴は周囲を確3点で固めている。

S B02

調査区北西半部に位置し、全体を検出した。1間(2.1m)×3間(6.5m)の南北棟建物である。建物周辺に柱穴は少数しか検出していいため、この規模で復元したが、削平により損なわれた柱穴があり、本来の建物はもう少し大型になるかもしれない。桁行方向はN-40°Wを示す。柱間は梁行、桁行ともに概ね2mを測り柱の通りは比較的良好である。柱穴は掘方の径15~40cm、深さ20cm以下である。北西隅の柱穴は掘方内に礎が入る。

柱穴内から遺物は出土していない。

柱穴

主に北半部で検出した。遺構面は削平を受けていることから、復元しえない掘立柱建物や構などを構成するものも含まれると思われる。所属時期は中世が主体であるが、一部から古墳時代の須恵器杯が出土していることから、中世をさかのばる時期に属するものも混じると考える。

土坑

S K10

S B02東側で検出した。複数の柱穴と重複する。平面は不整な方形を呈し、規模は5.2m×4.3mを測る。深さは10cmと浅く断面は皿状を呈する。主軸方向はS B02とほぼ同じである。埋土はシルト質細砂

～極細砂の単層で、断面観察によると土坑埋没後に柱穴が掘り込まれている。

S K05

調査区南端付近で検出したが、遺構の一部は調査区外へ続く。S D01、S K02に隣接し柱穴と重複する。平面は不整な楕円形を呈し、規模は長さ1.5m以上、幅1.0mを測る。深さは4cmと浅く断面は皿状を呈する。

S K02

調査区南端付近で検出した。S D01、S K02と近接するが、重複する遺構はない。平面は不整な楕円形を呈し、規模は長さ1.0m、幅0.9mを測る。深さは12cmで断面は台形を呈する。

S K03

調査区中央付近で検出した。S K04と隣接するのみで他の遺構は周辺にない。平面は不整な長楕円形を呈し、規模は長さ2.2m、幅0.9mを測る。深さは8cmと浅く断面は皿状を呈する。

S K04

調査区中央付近で検出した。S K03と隣接する。平面は楕円形を呈し、規模は長さ88cm、幅68cm、深さは15cmを測る。断面は台形を呈するが底面は凹凸がある。

溝

S D01

調査区南半部で検出した。南北方向にやや弧状にのび、南側は調査区外へ続く。幅は0.5～1.0m、深さは8cm程度である。埋土はシルト質細砂の単層である。

小 結

遺構は段丘の端部にあたる調査区北端付近に集中する。掘立柱建物跡は2棟検出されたが、その方向は異なることから、少なくとも遺構は2時期想定することも可能だろう。より高位の段丘に近いS B01付近には柱穴が集中し、建て替えなど継続的に居住が行われていたと考えられる。また北半で検出した土坑はその主軸がS B03に近いものがあり、屋敷地を形成していたのかもしれない。S D01は段丘の縁辺をめぐり集落を画す性格の遺構であろう。

また、古墳時代の遺物を包含する柱穴を単独で検出されたが、未調査の高位段丘上には古墳時代までさかのほる集落が所在する可能性がある。

B - 1 地区の調査

ほぼ南北方向を向く調査区であり、B - 2地区とは水路により隔てられる。調査区の大半は猪名川河道への落ち込みにあたり、遺構を検出したのは南西部に限られる。遺構面は現水田面直下で検出した。遺構面はマンガンが沈着した細砂～極細砂層の上面である。検出した遺構は若干の柱穴と土坑、溝、落ち込みである。また河道への落ち際で護岸の一部とみられる石組みが検出されたが、その所属時期は明確でない。

土 坑

S K01

S K02、S D01と隣接するが重複はみられない。南北方向に主軸をもち、平面は長楕円形を呈する。規模は長さ1.2m、幅0.6mを測る。深さは10cmで断面は浅いU字状を呈する。

S K02

S K02と隣接するが重複はみられない。北東－南西方向に主軸をもち、平面楕円形を呈する。規模は長さ1.05m、幅0.68mを測る。深さは6cmと浅く断面は皿状を呈する。

S K03

東西方向に主軸をもち、平面は不整な隅丸方形を呈する。規模は長さ1.28m、幅0.95mを測る。深さは8cmと浅く断面は皿状を呈する。

溝

S D01

北西から南東方向に直線的に延びる。北西側は調査区外へのび、南東側は擾乱により損なわれているが、落ち込み(S X01)へ続くと推定する。検出長約3m、幅45cm、深さ10cmを測る。埋土はシルト質細砂の単層である。

落ち込み(S X01)

調査区南端で検出した。南側は調査区外へ続く。平面は不整で底面は東側へ傾斜をみせる。埋土はシルトの単層だが、礫や土器片を多く含んでいる。

小 結

遺構は南西半に限定され、調査区の多くの部分は猪名川河道であった。遺構は調査区の制約からごくわずかが検出されただけだが、これら遺構はB-2地区へ続き、本地区が集落の北東端となることが明らかとなった。

B-2地区的調査

B-1地区同様ほぼ南北方向を向く調査区であり、B-1地区とは水路により隔てられる。調査区の東半部は河川改修以前の猪名川河道にあたり、遺構面が残存するのは調査区西半部に限られる。遺構面は現水田面直下に2面程度の旧水田面があり、遺構面は旧水田面下の橙シルト質細砂層上面の1面である。遺構は調査区全域に分布するが、南半部がやや密度が濃い。検出した遺構は掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝などである。土坑の中には中世墓の可能性がある集石遺構も含まれる。また河道への落ち際に護岸の一部とみられる石組みが検出されたが、その所属時期は明確でない。

遺構

掘立柱建物跡

S B01

調査区北西半部に位置し、全体を検出した。2間(4.5m)×3間(52m)の南北棟の総柱建物である。桁行方向はN-17°Eを示す。

柱間は梁行が2mと22~23m、桁行が北から2m、18m、15mとなり、柱の通りは良好である。

柱穴は円形を呈し、掘方の径20~40cm、深さは30cm以下である。柱穴の多くは重複するものや接して検出したものがあり、建て替えなどが行われた可能性がある。P031からは瓦器梶が出土している。

S B02

調査区北西端で検出した。柱穴列として把握できたが、北側調査区外へ続き、掘立柱建物として復元できるものと考える。S B01の北側約2mにあり、S B01の北辺が1間分伸びる可能性もあるが、やや柱穴の通りがずれることから、別の建物と判断した。規模は3間(45m)であるが、柱間は1.2~1.8mとばらばらである。柱穴は円形を呈し、掘方の径20~40cm、深さ25cm以下である。

S B03

3間(6m)×2間以上(8m)の南北棟建物である。ほぼ方形に柱穴が並び、桁行方向はN-20°Wを示す。柱穴の欠ける箇所が多いため、全体図にのみ表示した。

土坑

S K04

調査区中央付近で検出した。東半は河道への落ち込みにより損なわれ、西半部のみ検出した。本来の平面形は梢円形を呈すると思われる。現存長1.5m、幅1.9mを測る。深さは12cm程度で断面は皿状を呈する。土坑内部には躰を投入している。

S K05

S K06と隣接する長梢円形の土坑で、検出長1.6m、幅0.7mを測る。深さは4cmで浅い皿状を呈する。

S K06

S K05と隣接する梢円形の土坑で、検出長1.0m、幅1.2mを測る。深さは20cmで断面は逆台形を呈する。

S K08

調査区南半で検出した。一部擾乱により損なわれるが、東西約3m、南北約2mの不整形の落ち込みで南側へ溝状にのびる。深さは10cm程度で断面は浅い逆台形を呈する。

S K09

擾乱により一部損なわれて全容は不明だが、残存部分は溝状の不整長方形を呈する。検出長4.2m、幅1.15mを測る。深さは10cmで断面は浅いU字状を呈し、底面はやや凹凸がみられる。S D05と重複し、本遺構が切られている。

S K10

長梢円形を呈し、検出長2m、幅0.8mを測る。断面は浅いU字状を呈し深さは12cmである。検出した位置から、本来はS K09と同一の遺構だったかもしれない。

S X01

調査区南端で検出した集石土坑である。東西方向に主軸をもつ梢円形を呈し、長さ1.4m、幅1.0m、深さ25cmを測る。断面はU字状を呈する。埋土の上層には45cm以下の礫をほぼ隙間なく投入し、その中に瓦器・土師器片が混じる。また埋土には炭・焼土はほとんど混じらない。

S X02

調査区南半、S X01の北側で検出した集石土坑である。S X01と同じく東西方向に主軸をもつ梢円形を呈し、長さ1.15m、幅0.65m、深さ6cmを測る。土坑内には礫が散在している。

溝

S D01

調査区北半で検出した。東西方向にのび、西側は調査区外へ続く。検出長4mを測る。S B 01と重複し、その方向がやや異なることから、時期差を持つと考えるが、先後関係は明らかではない。

S D02

調査区中央付近でL字状に延びる。その方向はS B01に近い。幅0.3m、深さ5cmである。

S D03

調査区南半部で検出した。南北方向に延びるが、その方向はS B01とはやや異なる。検出箇所からSK05・06と同一の遺構となる可能性がある。幅0.45m、深さ5cmである。

S D06

調査区南半部で検出した。南北方向に延び、その方向はS B01に近い。検出箇所や方向からSK09を切るSD05と同一の遺構となる可能性がある。検出長1.3m、幅0.25m、深さ5cmを測る。断面はU字状を呈し、底には凹凸がみられる。鶴溝と思われる。

S D07

調査区南半部で検出した。南北方向に延び、柱穴と重複する。検出長1.6m、幅0.25m、深さ5cmを測る。断面は浅いU字状を呈する。

小 結

遺構は調査区のほぼ全域で検出できたが、北半部では掘立柱建物跡2棟など、南端付近では中世墓の可能性のある集石土坑と柱穴が検出された。一方、中央付近は不明確な掘立柱建物跡の他は不整な土坑状の落ち込みがあるだけで、柱穴などの遺構は疎らとなっている。明確な区画を意図した遺構は検出できていないが、遺構の分布状況から調査区内では南北に2つの屋敷地が所在するものと考える。北側の屋敷地は、北はB-1区南西部で完結するが、西は調査区外へ続くものと推定する。

一方、南側の屋敷地は調査区内ではその一端を検出しただけで南側調査区外へ続くと考えるが、地形や確認調査の成果などから、さほどの広がりは持たない小規模なものと推定する。柱穴はまとまって検出したものの、掘立柱建物は復元しえなかった。この柱穴群に囲まれる中でS X01・02を検出したことから、この遺構は屋敷墓ではないかと考える。

第2節 出土遺物

1. A 地区

A地区から出土した遺物は弥生時代の甕、奈良時代の須恵器杯B、中世の土師器小皿・皿・黒色土器椀、瓦器碗、須恵器鉢・甕、丹波焼擂鉢、中国産の白磁碗・青磁碗などの土器類と鉄製品の毛抜き・釘などの鉄製品がある。図化した遺物は土器類27点、鉄製品2点である。以下、時代ごとに出土遺物について報告する。遺構からは須恵器甕（1）がP02、白磁碗（2）がP04が出土している。

弥生時代・奈良時代

弥生時代の遺物は甕（27）の底部片1点がある。底部外面がやや持ち上がる個体であるが、細片のうえ摩滅が著しいため詳細は不明である。奈良時代のものは須恵器杯B（26）1点である。体部下半は腰が張り、上方は外開きになる。高台は台形状で、ハの字に聞く個体である。

中世

土師器 小皿（3・5・6）・皿（4・7）・羽釜（8～11）の9点がある。皿は手づくねのもので占められる。羽釜8～10はすべて内傾する口縁部をもつ。8は口径11.5cmと小型で、小さな鈎を持つ。9・10は口縁部下半に板状の鈎を持つ。11は脚部の破片である。

須恵器 鉢（15）と甕（1）の2点がある。鉢は口縁端部を上方につまむ。甕は底部の破片で、外面に上下方向の平行タタキが観察されるが詳細は不明である。

瓦器 碗（19～25）の8点を図化した。見込み輪状暗文（22）と平行暗文（24・25）が認められ、体部はミガキ調整が施されるが、外面にはミガキ調整が観察されない。高台は底体部の境界付近に小さな輪高台が貼り付けられる。高台の断面は台形（25）ないし三角形（23・24）である。

丹波焼 擂鉢（16・17）の2点がある。16は底部片で内面に1本描きの鈎目が観察される。17は口縁部片で口縁部がやや内傾し、端部を丸くおえる個体である。

鉄製品 毛抜き（F 1）と鉄釘（F 2）がある。

2. B - 1 地区

B - 1 地区から出土した遺物には弥生時代・奈良時代・中世のものがある。器種は弥生時代の甕、奈良時代の須恵器甕、中世の土師器小皿・鍋、黒色土器椀、瓦器皿、須恵器鉢・甕、瀬戸焼丸皿、中国産の白磁碗・青磁碗・梅瓶がある。図化した個体は12点である。遺構からはSK04から土師器鍋28・29、瓦質羽釜31、須恵器甕33・鉢34、SK05から白磁碗30が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺物は甕（40）がある。底部がやや持ち上がるが、細片のため詳細は不明である。

奈良時代

奈良時代の遺物は須恵器甕（34）がある。ハの字に踏ん張る高台から斜めに立ち上がる体部を持つ。

中世

土師器 皿（35）は小皿で体部上半を横ナデ調整し、口縁端部をややとがり気味におえる。外面体部下半から底部は未調整で指痕痕跡が確認される。鍋は28が内傾する体部から、口縁部がやや外傾気味に立ち上がる。口縁端部を外方につまみ、内面は板ナデ。外面には右上がりの平行タタキが観察される。29は直立気味に立ち上がる体部で、口縁部がやや外傾気味で、端部を外方につまむ。内面はナデ調整、

外面には平行タタキの痕跡が観察される。

瓦器 盆(36)1点を図化した。内外面とも剥離や器表の荒れによって調整不明である。

須恵器 鉢(32)は東播系須恵器である。口縁部は肥厚し上下に拡張する。端部はやや内傾するが全体に厚手で調整は省略気味である。壺(33)は口縁がくの字に折れ口縁端をわずかに丸くつまむ。外面には平行タタキ、内面は平滑にナデる。

瀬戸焼 丸皿(38)灰釉の丸皿である。口縁部の破片で、体部中位でくの字に折り口縁部は丸く見える。

中国産 白磁碗(30)は口縁部の破片である。青磁碗(37)は口縁部の小片で、龍泉窯産のものである。39は壺もしくは梅瓶で外面に片切彫りの草花文様が観察される。

3. B-2 地区

B-2地区から出土した遺物には弥生時代と中世のものがある。器種は弥生時代の石鍬(S1)、中世の土師器・皿・鍋、黒色土器椀がある。図化した個体は14点である。遺構からの出土遺物はS X01から土師器皿41・黒色土器42、S X02から土師器皿43・黒色土器椀44(P122と接合)・45、S B 2のP11から瓦器椀46、P 81から黒色土器椀47、P 31から瓦器椀48、P 34から土師器鍋49がある。

中世

土師器 皿41は器表が荒れ摩滅する。内外面を横ナデ調整し、底部はヘラ削り調整。厚手の体部を持ち、外開き気味に体部が立ち上り口縁部を丸く見える。皿43は底部からやや丸く体部を立ち上げ、口縁部を外方につまんで端部をやや尖らせておえる。

皿50は外開き気味の体部で、口縁部を直立気味におえる。口縁部は横ナデ調整するが、その他は剥離や器表の荒れによって調整は不明である。

鍋49は内傾する体部から、口縁部がやや外傾気味に立ち上がる。内面は板ナデ。外面には右上がりの平行タタキを施す。

瓦器 碗46・48・51の3点を図化した。すべてやや内湾しながら丸く立ち上がる体部である。粗いミガキが内面にのみ観察され、外面はほとんど観察されない。高台は小さい輪高台を底体部の境に貼り付ける。

黒色土器 椋が一定量出土しているが、大半が細片である。これらの椀には輪高台で内黒タイプの42・44と、両面とも炭素を吸着させる47、ベタ高台で両黒タイプの45の3種類がある。椀42・44は内面をミガキ調整し、外面もわずかにミガキ調整を施す。体部は腰部が湾曲し、懷の深い器形となる。上半は外方に大きく広がり、上位で内湾気味になる。高台は小さく断面は三角形のものである。42は口縁部を横ナデし、屈曲が僅かに観察されるが、44は尖らせ気味にすんなりとおえる。

椀47は両黒タイプである。内面底部にジグザグ状のミガキ調整を施し、内外面ともに密なミガキ調整が観察される。口縁端部の内面にわずかに凹線が観察される。

椀45は丹波型黒色土器で、底部に回転系切り痕跡を残す。内面はわずかにミガキ調整を施すが、器面が荒れ調整は不明瞭である。

その他

鉄製品 釘F3と、不明F4がある。F3は頭巻の和釘である。下半を欠くため実寸は不明であるが、断面が4mm程度であるため3寸前後の釘と推測される。

石製品 S1は無茎式の石鍬である。

4. 小 結

ここでは各地区の概要を述べ、最後に中世遺跡について周辺地域との若干の比較をおこないたい。

A地区では弥生時代・奈良時代・13世紀代の遺物が出土した。ただし、弥生時代と、奈良時代は少量である上、遊離した遺物である。また、丹波焼鑄鉢16・17は遊離遺物のため詳細は不明であるが、他の遺物群に比べると時期が下る可能性が残される。

遺物群の中心となる13世紀代の遺物には土師器小皿・羽釜、須恵器鉢、瓦器椀・羽釜、中国産の白磁碗・青磁碗などがある。このうち瓦器椀にはいわゆる丹波型と考えられる19・22・24と、和泉型の範疇に含まれる18・20・21・23・25がある。20・23は器表が荒れて調整が不明であるが、全体的には外縁のミガキ調整が省略されており、暗文は平行暗文が主体となる。従って、これらの瓦器の時期は21がやや後出となるが、おおむねⅢ～Ⅳ～Ⅴ期段階に収まると考えられ、森島康雄氏（森島1992）によれば13世紀初～中頃に比定される。

B-1地区は13後半～14世紀の遺物が主体を占めるが、弥生時代の甕40、奈良時代の須恵器鉢34や中世後半の瀬戸焼丸皿38などの遺物も出土した。中世は28・29の土師器鍋の体部が直立気味である点や、32の東播系須恵器鉢（32）の口縁部が肥厚する点などを見ると、A地区よりもやや時期が下り、13世紀後半～14世紀前半ころのものが中心となる。

B-2地区は12～13世紀前半が大半を占めるが、弥生時代と思われる石鏡S1や時期不明の鉄製品（釘F3・鉄片F4）なども含まれる。

遺物の中心となる12～13世紀前半のものには土師器皿・鍋、黒色土器椀・瓦器碗などがある。瓦器椀のうち48は丹波型の特徴を持ち、46・51についても断定はできないが丹波型の特徴に近似する可能性がある。この一方、12世紀代と考えられる黒色土器椀が含まれる点や、土師器皿の特徴などを見ると時期的にはA地区より古い段階のものが含まれる。

次に、大阪府能勢郡や三田市域など近隣地域との遺物の様相を比較してみたい。本地点の中世遺物ではB-2地区の黒色土器椀に輪高台とベタ高台のものが含まれるが、ベタ高台のものは丹波で多く出土する。さらに、瓦器椀のうちA地区19・22・24、B-2地区48は丹波型瓦器椀の特徴を持つものである。ただし、A・B地区とともに瓦器椀に中には和泉型（B-2地区は未実測）も含まれている。また、黒色土器42・44は内黒である。

さらに、摂津西部との関係でいえば、須恵器が甕・鉢のみで椀が認められない点が挙げられる。兵庫県側の北摂地域では三田盆地までは須恵器椀が出土し、東側の宝塚市との市境に近い見比庶では須恵器を焼成する。しかし、小柿川流域の十倉遺跡の12～13世紀の集落に伴う遺物では瓦器椀のみで須恵器椀は含まれない。

一方、大阪府下の能勢郡では12世紀には瓦器椀・黒色土器椀が主体を占め、瓦器椀も含まれる。さらに13世紀になると丹波型が混在する。そして須恵器椀が終始含まれないなど、さまざまな点で猪名川町域である当遺跡と共通する。つまり、12～13世紀にかけての猪名川町域は土器様相の点では多田莊の地的な特徴を共有すると考えられる。

【参考文献】

兵庫県教育委員会1992『初田館跡』

兵庫県教育委員会2003『八上上遺跡』

川西市教育委員会2003『川西市栄根寺廢寺遺跡』

重金誠2000『畿内北部における平安時代の土器様相』『中近世土器の基礎研究XV』

尾上実1983『南河内の瓦器統』『藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会』

森島康雄1992『畿内産瓦器統の併行関係と層年代』『大和の中世土器II』

森 隆1995『黒色土器』『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

A 地区									備考
No	種別	器種	遭構	層位	口径	器高	底径	残存庫	
1	須恵器	甕	P 002	遭構面	—	(495)	—	細片	古墳時代（5C前後）の須恵器の胸部片。外側に細かな平行タキの痕跡を残す。堅緻な焼成。
2	白磁	碗	P 004	遭構面	(10.8)	(24)	—	細片	外開きの体部、口縁部は端部を外方につまんでおえる。
3	土師器	小皿	面検出	遭構面	(7.8)	(14)	—	全体の1/6	薄手で、内面および外面部口縁端部を横ナデ調整。体部は外側で端部を丸くおえる。
4	土師器	皿	面検出	褐色土包含層	(8.3)	(14)	—	口縁の1/5	薄手の個体で、底部は丸い。底体部の境は明瞭で体部はやや外開きに直線的に立ち上がる。手づくね成形。
5	土師器	小皿	面検出	褐色土包含層	(8.0)	(13)	(6.4)	全体の1/6	全体を横ナデ調整。体部中央はくの字に押れる。口縁端部をやや尖り気味におえる。クロロ土師器と思われるが器表が削減し切り離し技術は不明。
6	土師器	小皿	面検出	褐色土包含層	(7.2)	(14)	(4.5)	全体の1/6	厚手の個体で、体部を外開き性に立ち上げ、端部は丸くおえる。
7	土師器	皿	面検出	褐色土包含層	(9.7)	(19)	—	口縁の1/5	手づくね皿、やや厚手の個体で体部上半を横ナデ、底部は未調節。体部は外方に開いて立ち上がり口縁部はまるくおえる。
8	瓦質土器	羽釜	面検出	遭構面	(11.5)	(31)	—	口縁部細片	小さい板状のタガを口縁下に張り付ける。口縁部は端部を上方につまんでおえる。体部は内傾し、球形状の器形を持つ。内面に板ナデ痕跡。
9	瓦質土器	羽釜	面検出	褐色土包含層	(25.3)	(6.6)	—	全体の1/10	板状のタガを口縁下4cmに張り付ける。口縁部は角びやかに内傾しておまる。内面に板ナデ痕跡が複数されるが、全体に器表が摩滅し詳細不明。
10	土師器	羽釜	面検出	褐色土包含層	—	(3.2)	—	細片	板状のタガで、タガ周辺のみが残存する。全体に器表が摩滅する。外表面をナデ調節する。タガ下面には漆痕跡が観察される。
11	瓦質土器	羽釜	面検出	遭構面	—	(9.1)	—	細片	瓦質器羽釜の脚部片である。内外面に炭化の吸着が顕著に認められる。
12	白磁	碗	面検出	褐色土包含層	—	(17.5)	—	底部の細片	底部分、輪高台で外側は轍跡歩が残る。釉は薄い透明釉である。
13	青磁	碗	面検出	—	—	(25)	—	口縁部細片	竈焚窯の運作文碗。運作は陽刻で竈が表現される。外側の釉は気泡が目立ちやや白濁する。
14	青磁	碗	面検出	褐色土包含層	—	(24.5)	—	細片	竈焚窯青磁である。内面に線彫りで草花文を描く。緑色釉で内面には気泡が目立つ。
15	須恵器	鉢	面検出	遭構面	(31.7)	(4.55)	—	口縁部の細片	東播磨系須恵器鉢、口縁部は断面三角形で上方にやや拡張する。
16	丹波焼	搖鉢	面検出	褐色土包含層	—	(3.05)	—	底体部の細片	器表が摩滅した個体。内面に一本書きの削痕が観察される。
17	丹波焼	搖鉢	面検出	遭構面	(31.1)	(3.45)	—	口縁部の細片	口縁部を丸くおえる個体で、赤褐色を呈する。

第6図 北田原・南田原条里遭構遺物觀察表 (1)

No	種別	器種	遺構	層位	口径	器高	底径	残存率	備考
18	瓦器	椀	面検出	遺構面	—	(1.8)	6.3	底部片	晴文不明、内面にミガキ調整が観察される。輪高台で断面三角形。
19	瓦器	椀	面検出	遺構面	(10.6)	(3.05)	—	口縁部の1/10	内面に荒い開口のミガキ調整。体部は丹波焼特有の崩曲をもつ。
20	瓦器	椀	面検出		(12.9)	(3.95)	—	口縁の1/2	器表が荒れ、調整不明。
21	瓦器	椀	面検出	褐色土包含層	(13.4)	(3.15)	(4.0)	全体の1/4	器表が荒れ調整、晴文は不明。体部は丸く立ち上げ、底部には小さい痕跡程度の輪高台が強引付く。
22	瓦器	椀	面検出	遺構面	(13.8)	(3.7)	—	全体の1/10	口縁部がつまんで上方に折る。体部は外方に開き、器高は低い。内面体部はミガキ調整、底部に輪状暗文。外側は横ナメのみでミガキはない。
23	瓦器	椀	面検出	褐色土包含層	(14.5)	4.4	(6.6)	口縁の1/5	器表が荒れ調整、晴文は不明。口縁部の脚ナメが強くやや内側にくの字状による特徴を持つ。高台はハの字に踏ん張る。
24	瓦器	椀	面検出	褐色土包含層	(13.2)	4.65	(5.8)	全体の1/5	内面体部はミガキ調整、底部は平行暗文。外側は横ナメ調整のみか? 高台は筋付け高台、断面三角形でハの字に踏ん張る形態。
25	瓦器	椀	面検出	褐色土包含層	(14.5)	4.0	(7.7)	口縁の1/6	内面底部はミガキ調整、内面底部に晴文が部分的に観察される。高台は断面台形気味で、外側に踏ん張る。
26	須恵器	杯B	面検出	褐色土包含層	(13.3)	3.45	(9.6)	全体の1/8	古代の須恵器、杯Bである。体部は腰が張り、外方に開く。高台は断面が台形状で、ハの字に開いて踏ん張る。
27	弥生土器	甕	面検出	褐色土包含層	—	(2.25)	4.3	底部の細片	弥生土器甕の底部片である。
B-1 地区									
28	土師器	鍋	S.K.04 (集石)	不明	(20.9)	(6.45)	—	口縁部の1/8	内傾する体部から、口縁部がやや外傾気味に立ち上がる。口縁部を外方につまむ。内面は板ナメ。外側には右上がりの平行タタキ。
29	土師器	鍋	S.K.04 (集石)	不明	(22.0)	(6.9)	—	口縁部の1/8	直立気味に立ち上がる体部、口縁部がやや外傾気味に立ち上がり、縁部を外方にこむ。内面はナメ調整。外側には平行タタキの痕跡。
30	白磁	碗	S.K.05 (集石)	—	(1.8)	—	細片	口縁部の細片。	
31	瓦質土器	羽釜	S.K.04 (集石)	—	(10.05)	—	脚部の細片	瓦質土器羽釜の脚部片である。釜胴部との接合痕跡が観察される。外側には灰釉の残着が銀器であるが、内面には認められない。	
32	須恵器	鉢	集石	不明	(28.7)	(7.3)	—	口縁部の1/6	東播磨系須恵器である。口縁部は肥厚し上下に拡張する。縁部はやや内傾するが全体に厚手で調整は省略気味である。
33	須恵器	甕	S.K. 04(集石)	—	(24.2)	(4.2)	—	口縁部の1/6	口縁部がくの字に折れ曲がり口縁端をわずかに丸くつまむ。外側には平行タタキ、内面は平滑にナメ。
34	須恵器	甕	S.K. 04(集石)	不明	—	(5.2)	—	底部の細片	古代の須恵器甕の底部片である。高台を持ち器種であるが痕跡のみが残る。体部上部を横ナメ調整し、口縁端部をやや丸がり気味におえる。外側部下半から底部は未調整で少し指痕痕跡が確認される。
35	土師器	小皿	面検出	不明	(8.4)	(1.5)	—	全体の1/5	内外面とも剥離や器表の荒れによって調整不規。
36	瓦器	皿	面検出	不明	(8.7)	1.5	(3.0)	全体の1/4	電気窯業の青磁の口縁部片である。体部は外開きに立ち上げ、縁部をやや尖らせて気味におえる。
37	青磁	碗	面検出	不明	(14.6)	(4.0)	—	口縁部の1/8	瀬戸産の灰釉皿の灰釉色体部片である。体部中位でくの字により口縁部は丸く見える。
38	瀬戸窯	灰釉皿	面検出	不明	(9.0)	(1.5)	—	全体の1/8	中国窯の甕あるいは梅瓶などの器種か。外側に草花文様の一部が観察される。
39	青磁	壺・ 梅瓶?	面検出	不明	—	(4.5)	—	細片	器種不明。摩滅が著しく調整・施紋などは不明。底部外面がやや持ち上がる。
40	弥生土器	甕	面検出	不明	—	(7.4)	—	底部の細片	

第6図 北田原・南田原条里遺構遺物観察表 (2)

No	種別	器種	遺構	層位	口径	器高	底径	残存率	備考
B-2 地区									
41	土師器	皿	S X 01		(10.2)	1.8	(8.1)	全体の 1/2	器表が荒れ摩滅する。内外面を横ナナ 調整し、底部はハラ削り調整。外開き 気味の体形で、厚手の体部を持つ。
42	黒色土器	椀	S X 01		(15.2)	5.55	(5.8)	全体の 1/4	黒色土器柄、内黒タイプ。内面をミガ キ調整で外側公開部付近にも炭素吸 着。体部は外方に広がり上位でやや内 湾する。輪高台で断面は三角形。
43	土師器	皿	S X 02		(15.4)	(29)	—	口縁の 1/2	底部から丸く体部を立ち上げ、口縁部 を外方につまんで漏部をやや尖らせる。 内面および口縁部を横ナナ調整。
44	黒色土器	椀	S X 02・ P 122		(10.5)	5.3	6.2	口縁の 1/3	内黒タイプの黒色土器柄。内面にヘラ ミガキ調整。体部をは外開きに立ち上 げり、口縁端部は丸くおる。高台は 断面三角形。
45	黒色土器	椀	S X 02 付近		—	(18)	(6.5)	口縁の 1/2	丹波層黒色土器で内黒タイプの底部 片べた高台で回転系切り痕跡を残す。 内面にミガキ調整。
46	瓦器	椀	S B 01 P 11		(12.8)	(35)	—	口縁の 1/4	内面にハフミガキ調整の痕跡が観察さ れるが器表があれ詳細は不明。口縁端 部はやや尖らせておる。高台は断面 三角形。
47	黒色土器	椀	P 81		(15.4)	4.3	(4.4)	口縁の 1/4	黒色土器。両黒タイプ。内面底部にジ グザグ状のミガキ、および内外面とも に巣なミガキ調整。口縁端部はわずか に凹穂状となる。
48	瓦器	椀	P 31		(12.5)	5.0	5.0	口縁の 1/4	内面の今体と、外側の口縁部周辺をヘ ラミガキ調整。内面底部はジグザグ状 暗文。口縁端部は尖らせておる。高 台は断面三角形。
49	土師器	鍋	P 34		(17.8)	(8.1)	—	口縁の 1/6	内側する体部から、口縁部がやや外傾 気味に立ち上がる。内面は板ナナ。外 面には右上がりの平行タタキ。
50	土師器	皿	面検出		(12.8)	2.25	(5.8)	全体の 1/6	外開き気味体部で、口縁部を直立気 味におる。ただし、内外面とも剥離 や器表の荒れによって調整不明。
51	瓦器	椀	面検出	暗褐色土	(13.7)	(3.55)	—	細片	底部輪高台の黒色土器。内黒タイプ。 内外面とも剥離や器表の荒れが著し い。によって調整不明。

金属製品

A 地区									
No	種別	器種	遺構	層位	長さ	幅	厚み	残存率	備考
F 1	鉄製品	毛抜き	面検出		10.5	(13.5)	0.9	先端折れ	
F 2	鉄製品	釘	面検出		(3.05)	0.6	0.5	両端欠損	鉄片
B 地区									
No	種別	器種	遺構	層位	長さ	幅	厚み	残存率	備考
F 3	鉄製品	釘	S K 04		(4.9)	0.7	0.65	部分のみ 残存	和釘、頭巻き釘
F 4	鉄製品	不明	面検出		(7.5)	(6.2)	0.95	小片	鉄片

石製品

A 地区									
No	種別	器種	遺構	層位	長さ	幅	厚み	残存率	備考
S1	打製石器	石鏟	P 95		14.5	21.0	3.5	先端折れ	無刃式製石鏟。重量 0.89g

第6図 北田原・南田原条里遺構遺物観察表 (3)

第4章　まとめ

今回の調査は猪名川町域の中世遺跡調査としては初めての調査となった。特に、掘立柱建物など集落に関わる遺構の検出は最初であり、この地域を知る上で多くの端緒をえることができた。本項では調査の概要について総括し、本遺跡の様相について若干の予察を行うこととしたい。

A地区では掘立柱建物（S B01・02）、柱穴・土坑・溝が検出された。これらの遺構は大半が13世紀初～中頃のものである。建物に復元できたものは1棟であるが、柱穴群の検出状況からするとさらに何棟かの建物が存在した可能性が高い。特にA地区は全体的に開墾に伴う上面の削平が著しく、遺構の残存状況が悪く、把握できなかった遺構も多いと推測される。

B-1地区では柱穴、土坑、溝、落ち込みなどが検出された。調査区の東側は猪名川河床へ落ち込む急斜面で遺構が形成されるのは西側の狭い範囲に限られ、13後半～14世紀前半の遺物が大半を占める。

B-2地区は最も中世遺構が出土した地区で、掘立柱建物（S B01～03）、柱穴・土坑・溝などがある。このうち、土坑S X01・02は中世墓の可能性があり内部に集石遺構が認められた。掘立柱建物で柱並びが完全に復元できたものはS B01のみであるが、A地区同様に多数の建物が存在したと考えられる。

また、当該区の建物群はS B01・02周辺とS B03以南の範囲に大きく分けられることから、2つの屋敷地が存在したと考えられる。両者とも明確な屋敷区画は持たないが、隣接して屋敷が並ぶことからいくつかの自立した屋敷群が接して集落を形成していた可能性が高い。遺物からすると時期は12～13世紀前半を中心とする。

このほか、今回の調査では少量ながら、弥生時代・奈良時代の遺物も含まれた。これらからは周辺に当該期の遺跡の存在を予測させるが、今回の地区内では検出されなかった。ただし、地形からすると段丘の安定した平坦面が西側に広がっており、中世の集落も含めて遺跡の中心は西側に広がると思われる。今後中世およびそれ以前の遺跡が検出されることを期待したい。

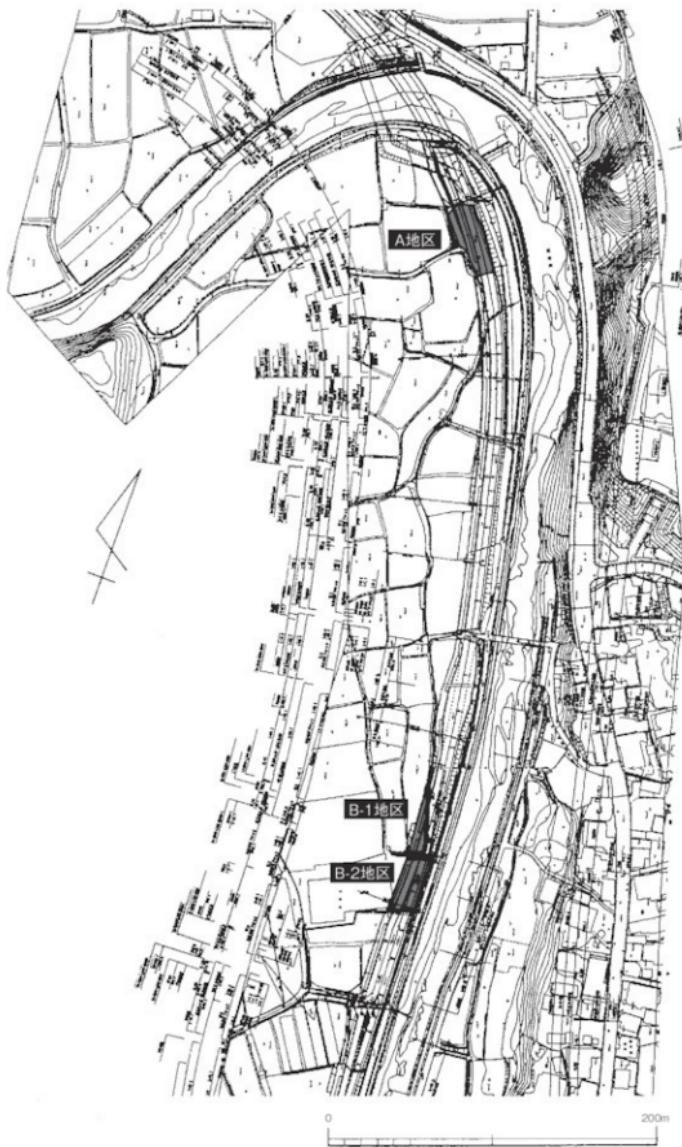
さらに、今回の中世遺物（12～13世紀代）の様相は大阪府能勢郡に近似することが明らかとなった。この点からみると、多田莊城の土器消費には共通する文化をもつことが判明した。一方、A・B地区の遺物の時期はB地区がA地区より早く12世紀代からのものが認められ、隣接するB-1区の遺物群も合わせると14世紀にも一部存続するようである。このためB地区はA地区よりも発生・廃絶とも長期にわたって機能した可能性が高い。

また、当該地周辺に広がるとされる条里地割と集落の関係についてはB-2地区的S B01～03やS X01・02など集落に関わる遺構の大半が比較的この方位を踏襲する点から見ると、地割が12～13世紀代には確実に存在したことを示した。一方、A地区ではS B01が主軸を北東に振り、S B02がほぼ北を向くなど条里とは無関係に軸を持つようである。さらに、この地区的S D01は段丘の縁辺を巡り、集落の境を区切る溝の可能性が指摘されている。このことから、ほぼ同時期に存続した集落ではあるが、やや後発であるA地区的遺構は条里地形よりも自然地形に影響をうけた可能性が高い。以上からするとB地区周辺では条里遺構は12世紀頃以降には存在したといえるが、河川に近いA地区では地形の制約から、この時期にはまだ条里の施工外であった可能性が推測される。

図 版

図版1

調査区位置図



調査区の位置

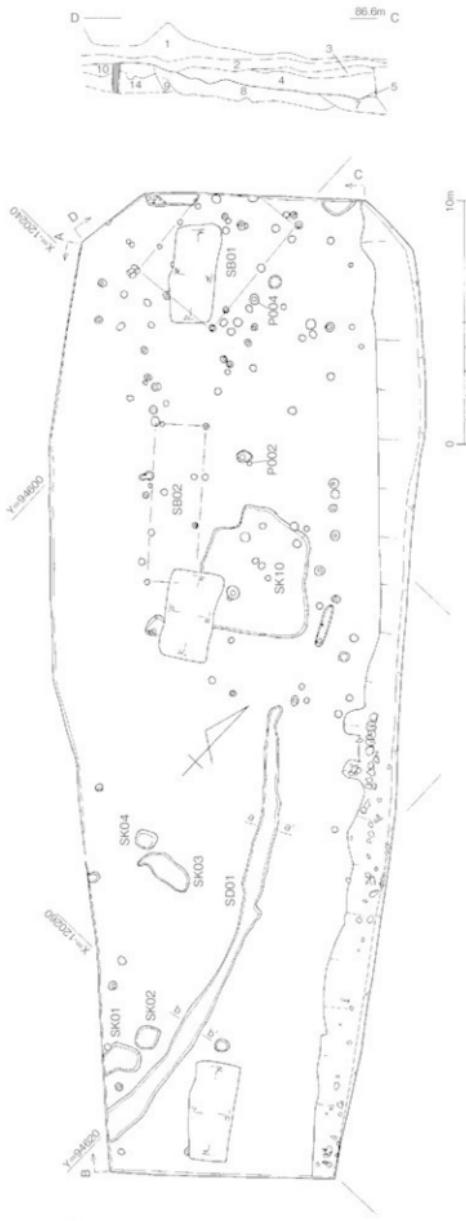
図版 2

A 地区

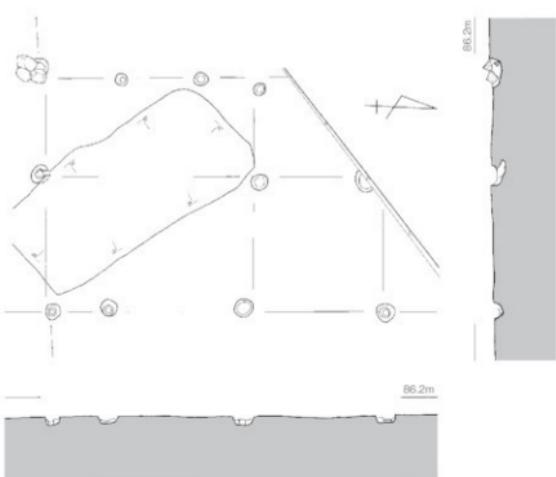
B ————— 85.6m A



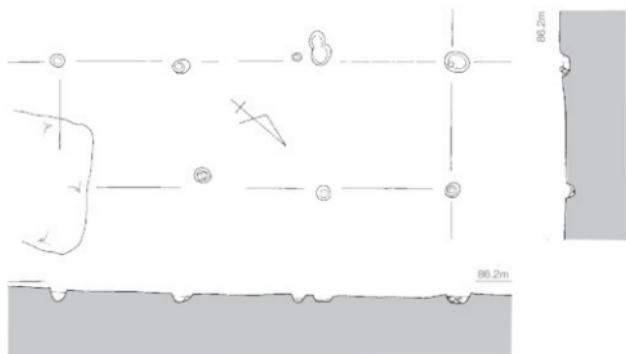
1. 植土	10. 30Y862 沢	19. 25Y854 C-D-N 施
2. ほ土	11. 30Y711 C-D-N 施	20. 25Y62 施
3. 10Y772 C-D-N 施	12. 73Y868 稲	21. 30Y862 施
4. 10Y861 開	13. 30Y866 稲	22. 30Y862 施
5. 30Y873 C-D-N 施	14. 30Y867 稲	23. 30Y872 C-D-N 施
6. 25Y862 C-D-N 施	15. 30Y869 稲	24. 15Y872 C-D-N 施
7. 25Y863 C-D-N 施	16. 30Y860 稲	25. 30Y863 C-D-N 施
8. 10Y871 沢	17. 30Y862 沢	26. 30Y863 C-D-N 施
9. 10Y862 沢	18. 73Y864 開	27. 30Y863 C-D-N 施



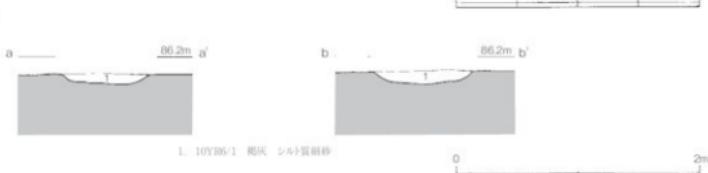
SB01



SB02



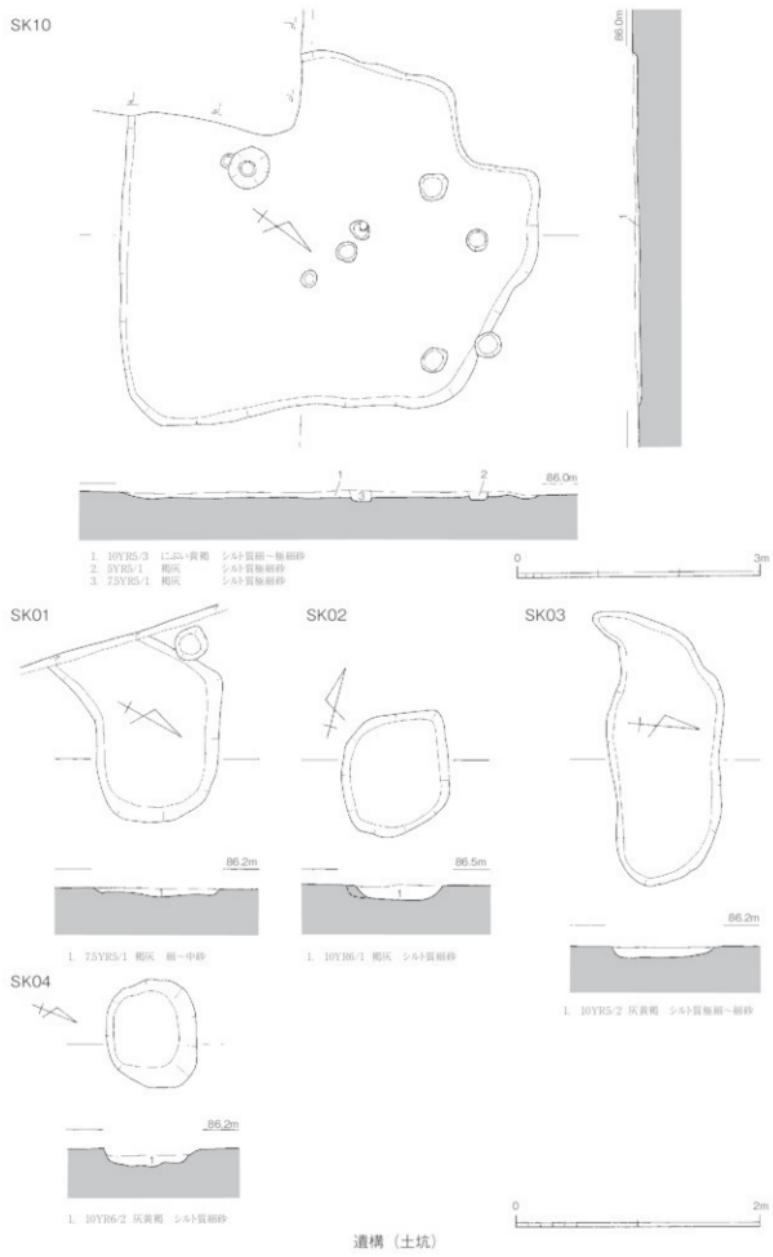
SD01

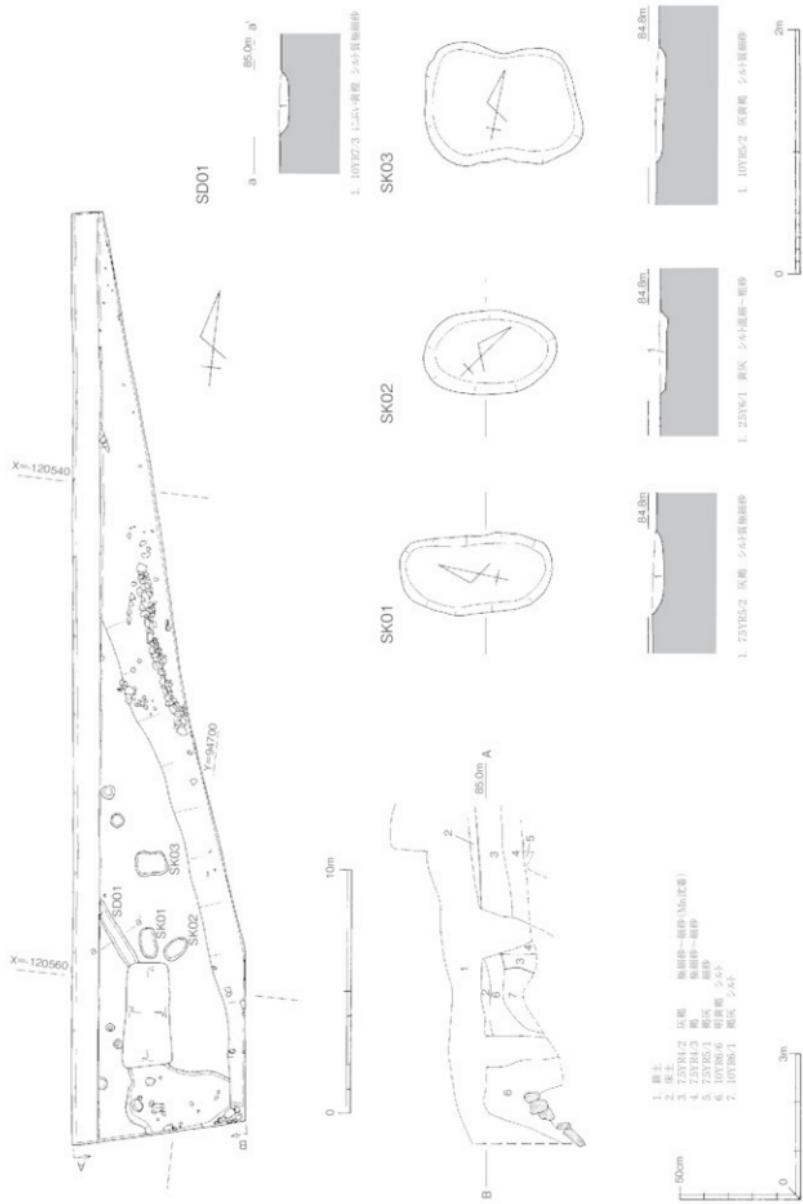


遺構（振立柱建物跡・溝）

図版 4

A 地区

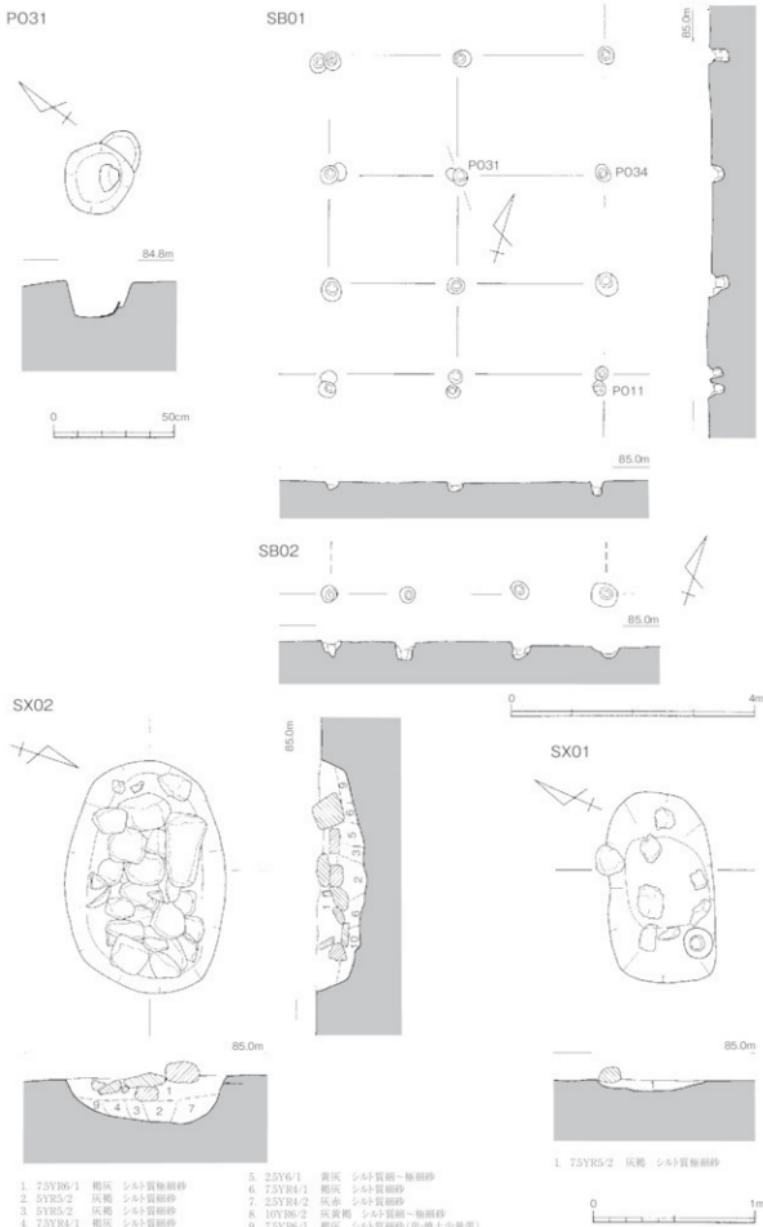




図版 6

B-2 地区

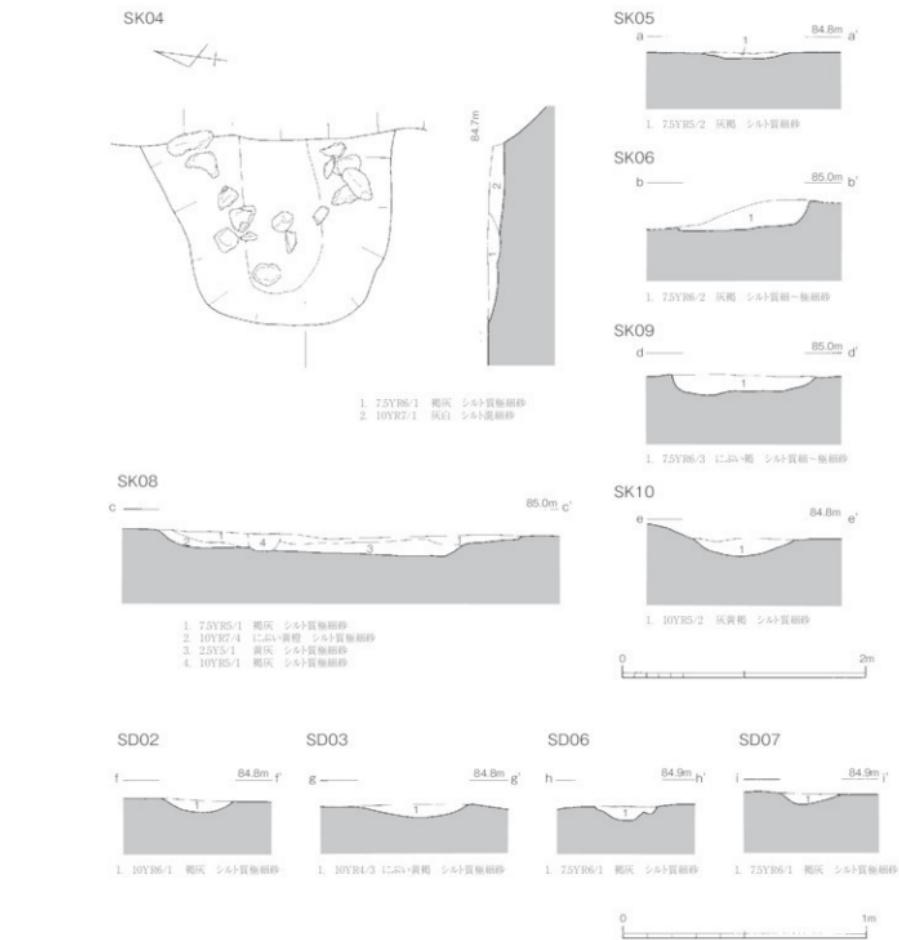




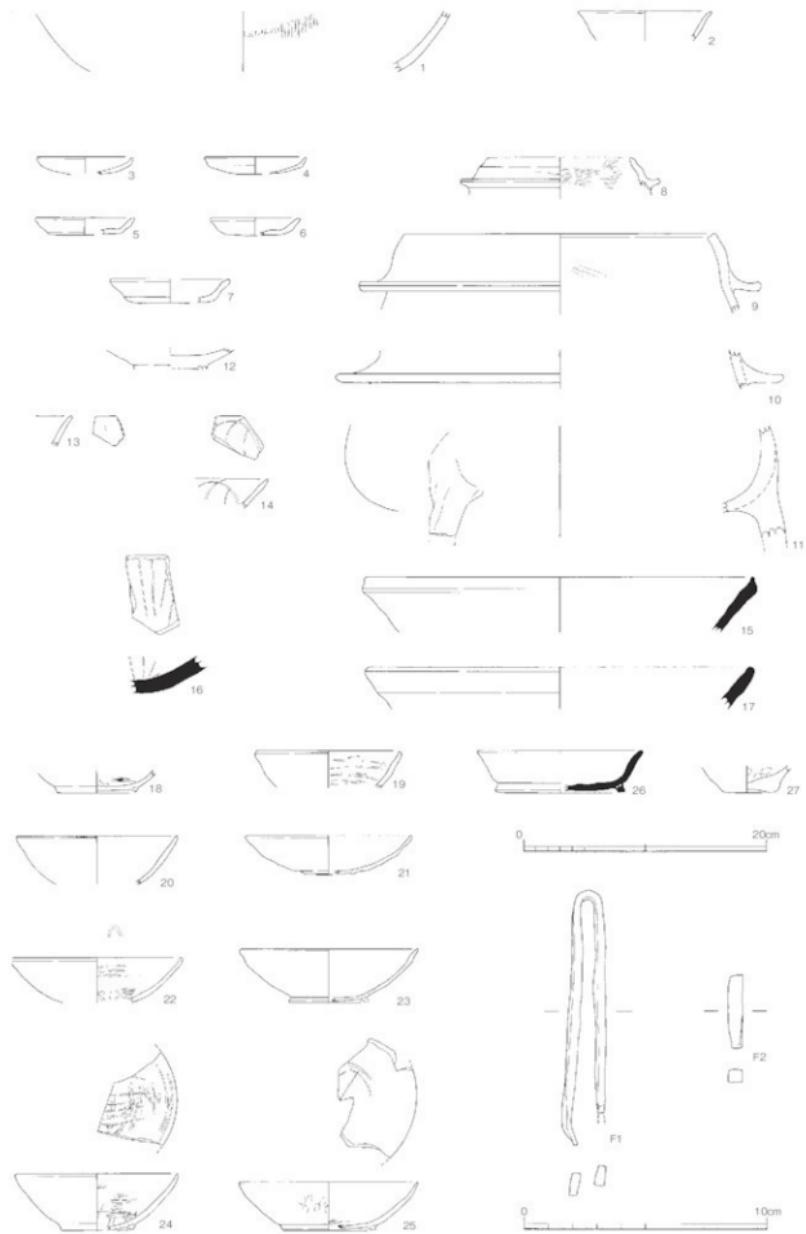
遺構（掘立柱建物跡・土坑）

図版 8

B-2 地区

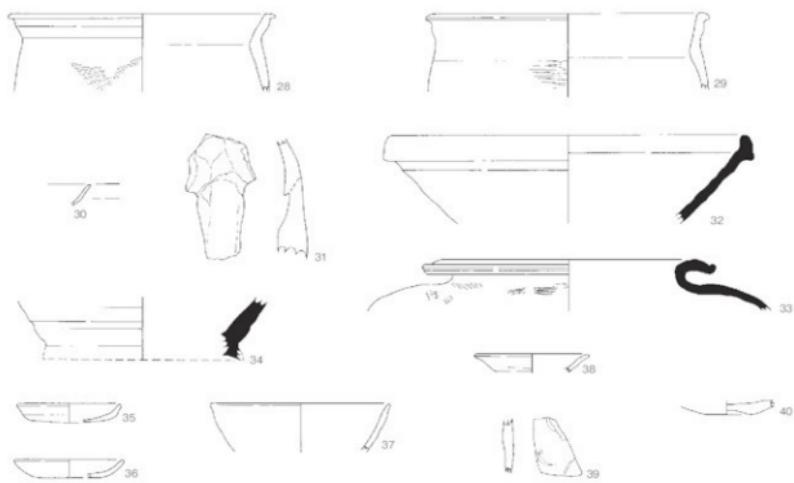


遺構（土坑・溝）

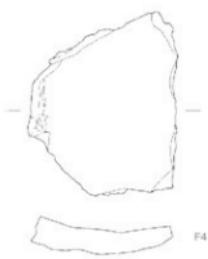
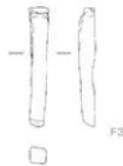
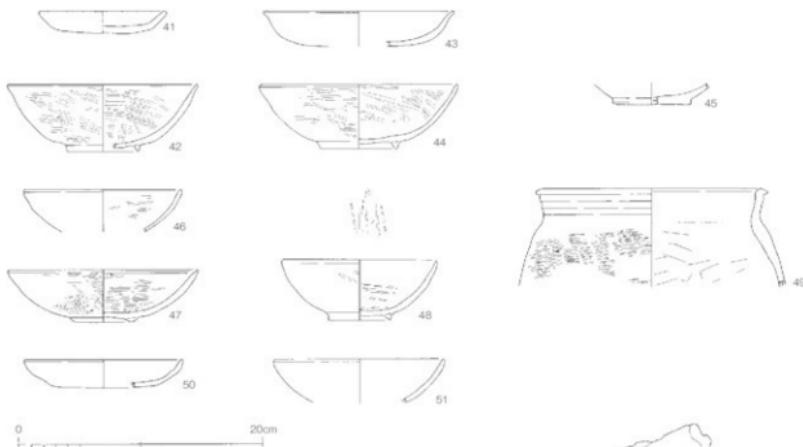


図版 10

B-1 地区



B-2 地区



写真図版



遺跡の遠景（西から）



遺跡の遠景（北から）

写真図版 2

A 地区全景



調査区全景（南から）



調査区全景（垂直写真 右が北）

写真図版 3

A 地区近景



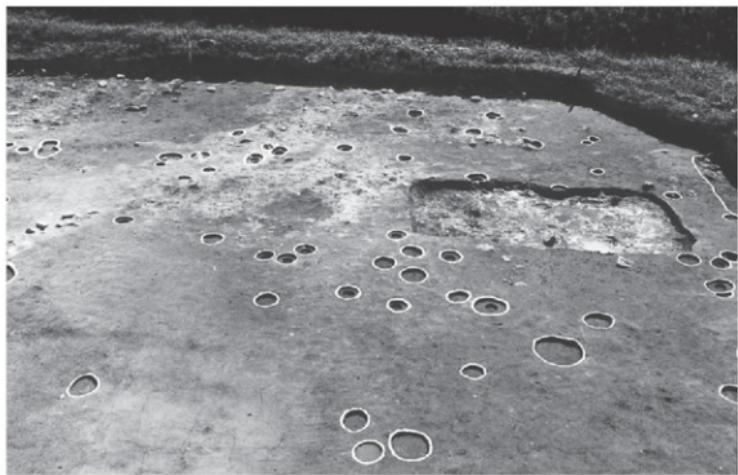
調査区全景(南から)



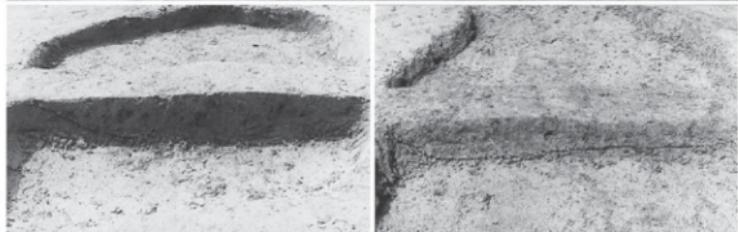
調査区全景(北から)

写真図版 4

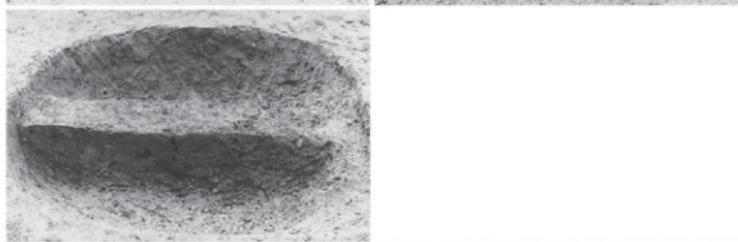
A 地区遺構



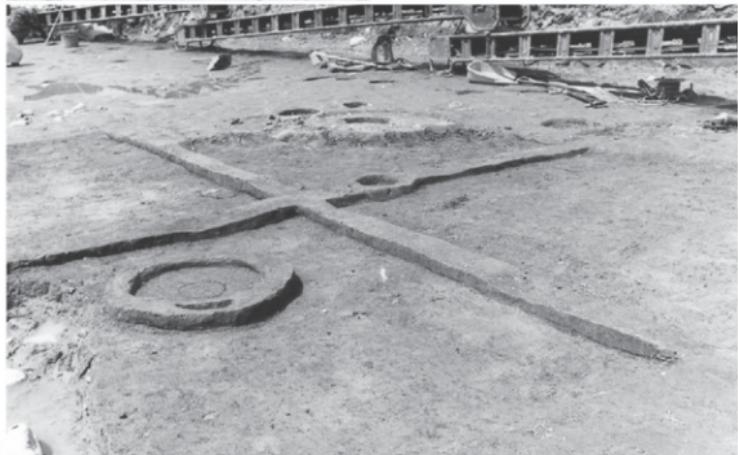
SB01(東から)



SK01断面(東から)
SK03断面(東から)



SK04断面(東から)



SK10断面(西から)



SD01(南から)



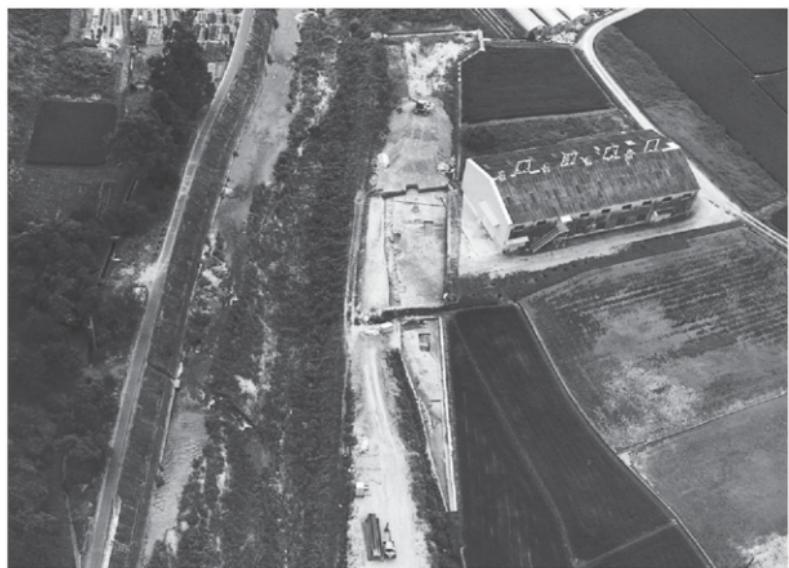
SD01断面(南から)



西壁断面(東から)

写真図版 6

B 地区全景



調査区全景（北から）



調査区全景（垂直写真 左が北）



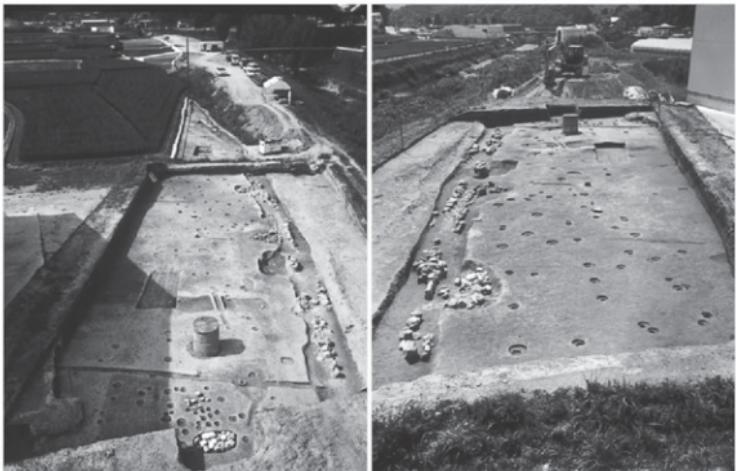
調査区全景(北から)

左) SK01断面(南から)
右) SK02断面(西から)

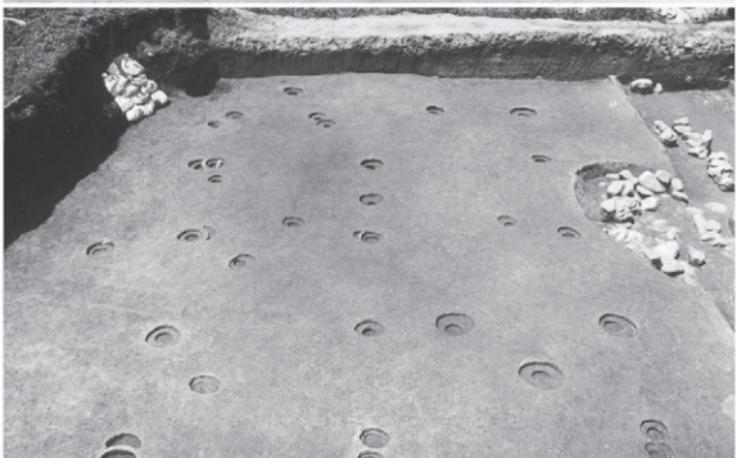
SK03断面(西から)

写真図版 8

B-2 地区近景・遺構



西壁断面(南から)



SB01-02(南から)



写真図版 10

B-2 地区近景・遺構



SX02(北から)



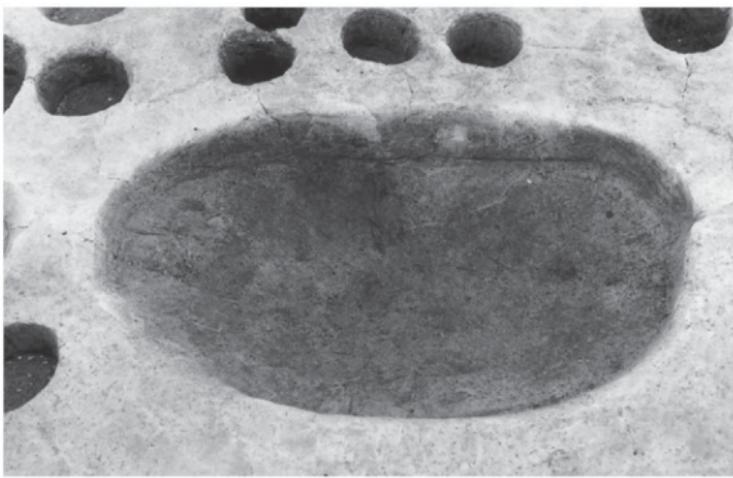
SX02断面(北から)



SX02下層東西断面(北から)



SX02土器出土状況



SX01 完掘状況
(北から)



SK04 (北から)



SK04 断面 (南から)

写真図版 12

B-2 地区近景・遺構



SK08断面(南から)



SK09断面(西から)



SK10断面(東から)



SD02断面(北から)



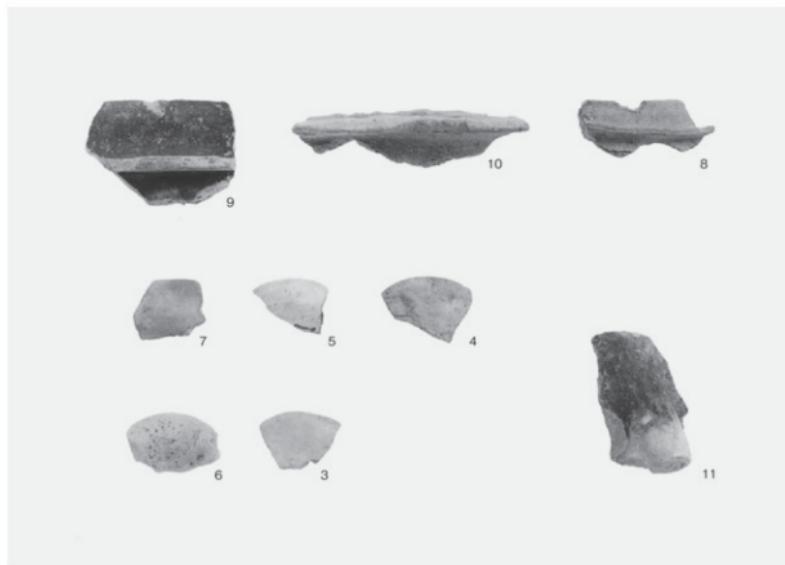
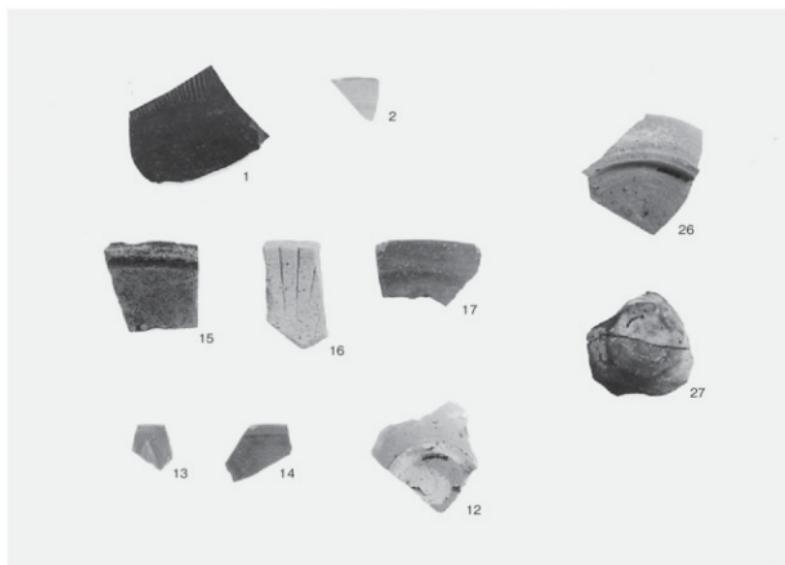
SD03断面(北から)



左) SD06断面(南から)

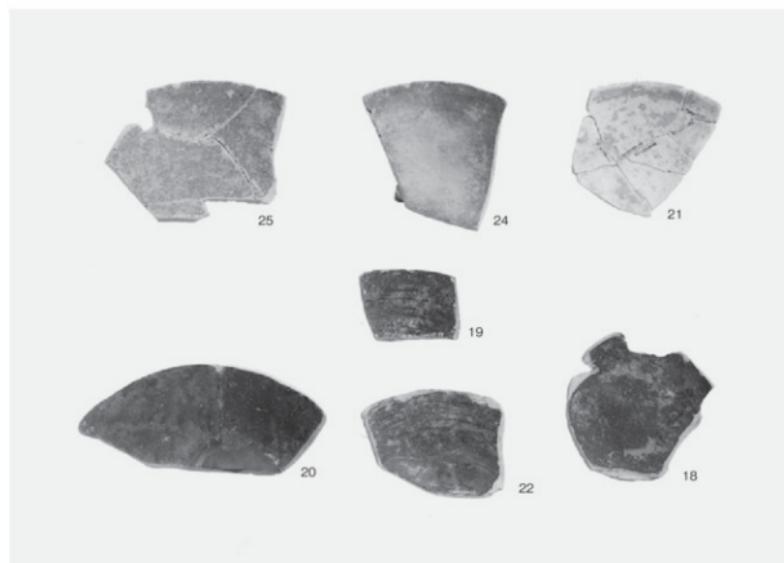
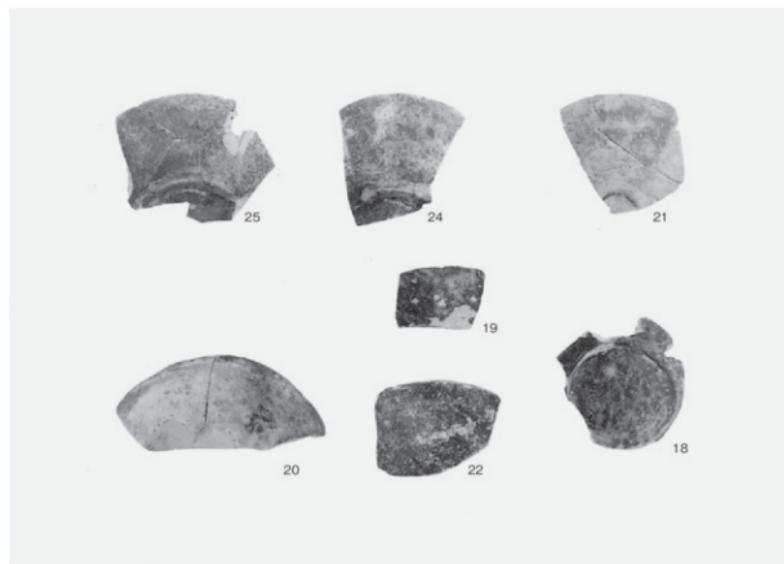


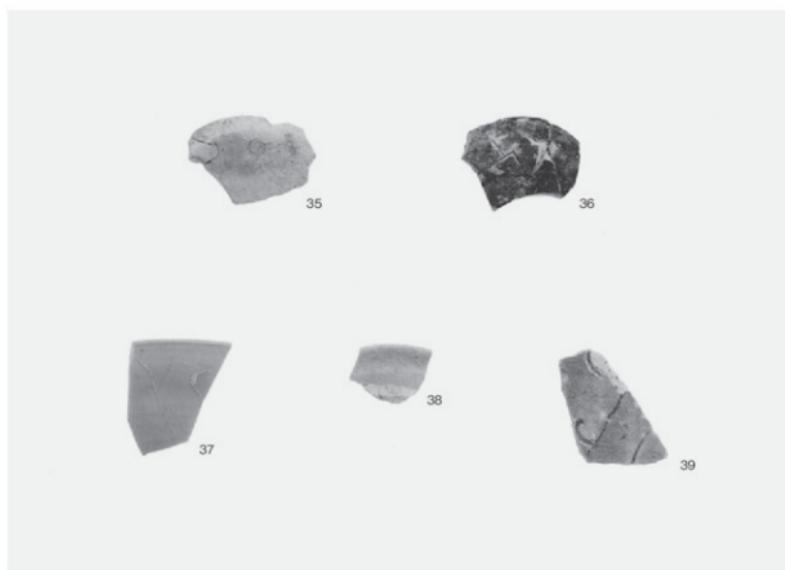
右) SD07断面(北から)



写真図版 14

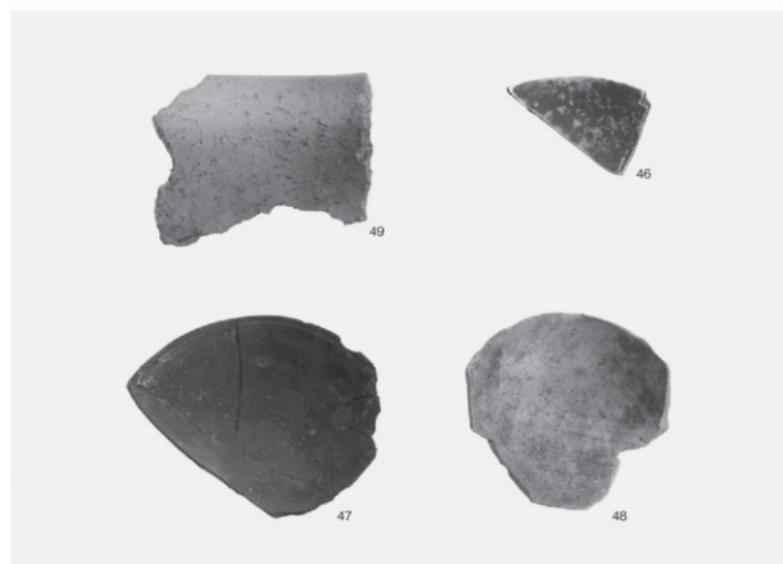
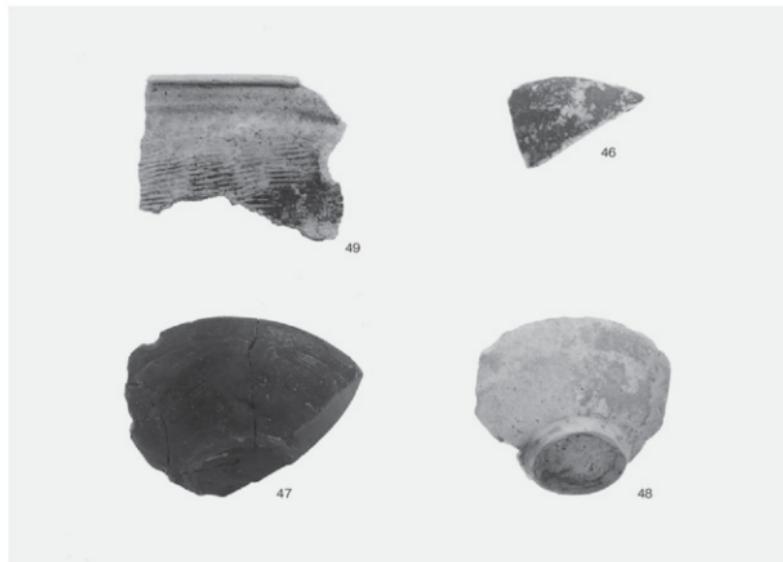
出土遺物





写真図版 16

出土遺物





報告書抄録

ふりがな	きたたはら・みなみたはらじょうりいこう							
書名	北田原・南田原条里遺構							
副書名								
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告第394冊							
シリーズ番号								
編著者名	山上雅弘・長濱誠司							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel.079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒 650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel.078-341-7711							
発行年月日	2011（平成23）年3月24日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北田原・南田原条里遺構	川辺郡猪名川町南田原	28301	210036	34度 44分 4秒	135度 20分 9秒	平成18年 7月10日～ 8月18日	1.095m ²	(主)川西 篠山線道路 改良工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北田原・南田原条里遺構	集落遺跡	平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物・柱穴・溝・ 土坑・墓	土師器皿・鍋、瓦器 椀・皿、黒色土器椀・ 須恵器捏鉢・青磁碗・ 白磁碗		なし		
要約	A・B-1・2地区の3地区を調査、A地区で13世紀初～中頃、B-1地区で13世紀～14世紀、B-2地区で12世紀から13世紀ごろの集落を検出。A・B-2地区で掘立柱建物、B-2地区で土坑墓が検出されている。このほか弥生時代の甕や石器、奈良時代の遺物が出土しており西側段丘中心部に集落遺跡の本体が予想される。							

*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告第394冊

北田原・南田原条里遺構発掘調査報告書

(主)川西蘿山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23(2011)年3月24日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

電 話 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

電 話 078-341-7711

印 刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
